

ものが多く、どういったときに手話を使うのかななどの質問が多い。

手話をコミュニケーション手段とするロールモデルに出会えば、家族や本人の関心はどこで手話を覚えたかとか何歳の時から習い始めたのか、ということが多い。どのように友達と知り合い、友人関係を築いてきたのかというもの知りたがる。手話が毎日の生活にどういった影響を及ぼすのかも興味のあるところである。

15. 社会的・情緒的支援

社会的・情緒的支援は学校よりも家庭訪問の場で重要な意味を持っている。聞こえない子どもを持った両親はショックをうけ、混乱している。彼らは、子どもの将来に対して持っている自分たちの疑問や不安の答えをロールモデルが出してくれることを期待している。ロールモデルが語る経験を通しての意見を喜んで聞き、情報を得たいと考えている。もし、否定的な経験ならば、それはそこから学べるものがある。聞こえないためにいじめられた経験があればそのときにどのように解決したかを語るとよいであろう。先生の質問が聞こえないときにはどのように対処したかを話して聞かせるのもよい。困難な状況を克服したこと、まわりの援助について話し合うのは両親にとって救いとなるが、それが決して「こうあらねばならない」こととして呈示しないよう注意しなければならない。

また、様々な状況のもとで、ユーモアによって自分たちの困難がいかに救われたかという話を織り交ぜるのもよいだろう。家族や本人たちはコミュニケーションのずれがいかにして起こり、誤解が生じ、手話が間違っている、終わりよければすべてよしとなるのを聞くのもおもしろい。コミュニケーション上の誤解があっても、それでこの世の終わりではない。聞こえないという現実も、おもしろい話を聞くことで、心が安まるということがある。こどもが生まれてからほとんど笑ったことがないという両親の話を聞いたことがある。

家族に聞かれた質問に対して、快く返答できないと思ったり、それについては話したくないと思ったときは遠慮なくその旨を告げるとよい。また支援中にアドバイスを受けられるよう助言者や教師に相談することもでき、それにより家族や本人ともよりよい関係になるであろう。

16. 参考資料の準備

聴覚障害に関係する団体とコンタクトをとったり情報を知ることでもまた手助けとなる。ロールモデルはこういった聴覚障害に関する適切な情報を呈示することができる。小さな「図書館」を携えて家族や学校へ支援訪問することも援助となる。その内容は「押しつけ」ではなく、どういったことがあるか、どんなものが手にはいるかと示すためのものである。

参考資料の例：

- ・聴覚障害に関するホームページ
- ・聴覚障害者団体の発行する会報や雑誌（アレキサンダー・グラハム・ベル協会、全米ろうあ連盟、聴覚障害自立センター、『ヒアリングヘルス』、手と声、『ろう者の生活』等）
- ・ADCO 発売の出版物や支援グッズのカタログ、コロラド唯一の製造販売団体 カタログにはホームページアドレスと申し込み用紙が入っている。
- ・実物の呈示：TTY や個人携帯のFM システム、目覚まし時計など
- ・聴覚障害児に関する記事の切り抜きやマーリー・マトリンやヘザー・ホワイトストーンなどの成功を祝う記事。HIP 誌なども最適。

17. 支援のポイント

①まず準備！

あなたは支援する生徒や家族について集められるだけの情報を収集しておくこと。だれでも心を開いて接すればコミュニケーションできる。自分自身についても相手に伝えよう。そうすれば期待は現実のものになるであろう。

②小道具も用意！

聴覚障害、団体に関する情報やグッズを持って行こう。小さい頃の写真、今の写真、家族写真、スポーツなどの写真などを持って行こう。補聴器などの機器、そしてもしいれば聴導犬もよいだろう。とにかく、あなたが聞こえる人とは異なるのだと感じさせるものであればなんでも持って行こう。

③聞こえない子どもを巻きこもう！

彼らをスターの気分にしてあげよう。今まさに彼らが主役なのだから。

④カメラを持参！

写真を撮って、後で送ろう。

⑤小さな手みやげを！

少人数であればちょっとした手みやげを持って行こう：ASL の書いてある鉛筆やろう者に関する絵の描いてあるTシャツ、ADCO 製造のアクセサリなど。ただし、手みやげは支援者の選択に任されるもので訪問の必要条件ではない。

⑥家族や教師に対する事後フォローを！

訪問のお礼と聴覚障害について学び続けてくれるように励ましを送ろう。かれらも感謝を表してくれるだろう。

付録1：アメリカ手話（ASL）資料

アメリカ手話～その歴史、文法そしてコミュニティー

①ASLとは？

- a. 視覚的身ぶり言語
- b. 手指、腕、目、顔、頭、身体の特異な動きと形
- c. 音声に代わる身体の動き
- d. 目から入る言語的情報

②ASLの歴史とは？

- e. トーマス・ホプキンス・ギャローデットが1817年渡仏し、ローレント・クラーク（フランスのろう教師）と会う。その後、二人はコネチカット州ハートフォードにおいて最初のろう学校を設立。
- f. ASLの60%はフランス手話が語源。40%はその他から。

③ASLはだれが使っているのか？

- g. ろうコミュニティーの聴覚障害者
- h. ろう文化に属するろう者
- i. 親戚（両親、姉妹、兄弟、叔父、叔母）
- j. 聴覚障害者／ろう者とともに仕事をする人々
手話通訳者、教育者、教師

④ろうコミュニティー／ろう文化とは？

- k. ろう者および難聴者個人
- l. 共通言語を共有
- m. 相互交流時の共通手段
- n. 共通経験と価値観
- o. 聴覚学上の聴覚障害ではなく態度に表れた聴覚障害
- p. ASLを知っていること、使用できること（主たる特徴）

⑤ASLの要素とは？

- q. 手指の形
- r. 手のひらの向き
- s. 動き
- t. 位置

付録2：コミュニケーションのポイント

失聴によって人は音を媒体とする情報を得る能力が著しく低下することを覚えておかなければならない。そのため、聴覚障害者は話しかけられたとき、相手の言っていることを理解しようと視覚に頼ることになる。ほんのちょっとした配慮によって聞こえない人たちはあなたの言うことが明確に分かるようになる。

- ① 軽度の聴覚障害であっても、話されていることを理解する力は低下することを知っておくこと。補聴器は聴力を取り戻す器機ではない。
- ② 話し始める前に、必ず聞こえない人の注意を自分に向けさせること。肩や腕を軽くたたいたり、手や紙を振ったりまたは近くに寄って気づかせたりということをする。
- ③ 聞こえない人と顔を合わせ、会話の間は視線をはずさないこと。手話通訳者に直接話さず、常にろう者に向かって話すこと。
- ④ 聞こえない人のすぐそばに立たないこと。あなたと聞こえない人の間に遮蔽物がないようにする。黒板に何か書いているときには話さないこと。
- ⑤ あなたの口元や顔がはっきりと見えるかどうかを確認すること。話しているときは食べたり、たばこを吸ったりまたはガムをかんだり、口元を手で覆ったりしないこと。
- ⑥ 明るい場所に立つこと。電灯や窓などの光源となるものを背にして立たない—顔が影になり、はっきりと見えない。
- ⑦ 静かな場所で会話をする。背景の音にも気を遣うこと。
- ⑧ はっきりと、しかし普通通りに話し、口の動きを誇張しすぎないこと。
- ⑨ 声も出すが、大声の必要はない。音声を聞き取ってそこから情報を得る聴覚障害者もいるので声も出すとよい。しかし大声は語の音や口形を歪ませたりするので避ける。
- ⑩ 顔や身体表情をつけることであなたの伝えたいことがはっきりする。恥ずかしがらずに表情を豊かに。
- ⑪ あなたの言うことが伝わっているか、ただ頷いているだけなのかをしっかりと見極める。頷いていても言われていることが必ずしも分かっているとは限らない。
- ⑫ 初めての場面では、技術的な難解な単語を黒板に書かないこと。長い、一般的でない言葉は分からない場合もあることを知っておく。
- ⑬ 聞こえない生徒が分からなかった文章は繰り返し呈示するが、同じ文脈で何度も言わないこと。
- ⑭ 必要ならば鉛筆と紙などの視覚的な補助用具を使う。書き止めることを躊躇しない。
- ⑮ TDD やテレビ、デコーダー、フラッシュベルなどの聴覚障害者に有用な器機を取り付け、有効に使えるように設置する。

付録3：文化的差異

* ろう者の特徴を知り、理解することにより、より円滑に違和感なく交流ができる。

ろう者

気取らない—誤解をまねかないように「社交的な気取り」は避けること

些細なことも皆が共有し、わかりきったことも話し合う

遠慮なくものを言い、場を離れるときはその理由をはっきり言う（会合、教室、手洗い）

鼻を動かす

長居する

相手に分からないように指し示すときは表情や目の動きで（半手話）

言語学的機能、顔の表情、（眉の上げ下げ、口を開ける、目を見開く）

会話中に視線をはずすのは非礼—話しを聞いていないことを示す

注意喚起のために身体接触をする

手を振る、床を踏みならず、電気の点滅

話しながら歩く、ゆっくりと離れて

明るく広い台所に集う

本題にすぐ入る

聴者

礼儀正しい、ことさら物事を論争として取り上げない。

わかりきったことは取り上げない、言うまでもないと考える。

静かにその場を去る。

「はい」と言ったり頷く

長居はしない

ささやき

音声のイントネーション

視線をはずしても容認する

身体接触は避ける、個人の空間を重視

大声を出す

近くに並び、早く前を向いて歩く

音楽やテレビが見られる居間に集う

前置きのあとに本題に入る

[訳： 三澤かがり]

日本語版編集を終えて

今回、新生児聴覚スクリーニングに関する厚生労働科学研究の主任研究者である三科潤先生（東京女子医科大学母子総合医療センター）より、コロラド家庭訪問支援プログラム（CHIP）に関する2つの資料を提供いただき、その邦訳・編集を行う機会を得た。

ひとつは、コロラド州で実施されている「家庭訪問支援プログラム」に関する解説ビデオであり、もうひとつは、ろう者・難聴者本人（いわゆるレイ・エキスパート）によって実施されている「成人ロールモデルカリキュラム」の解説書である。そこで、前者のビデオの邦訳を聴覚障害者カウンセリングに通じている河崎佳子（京都女子大学）が、後者を手話通訳士の資格を持ち、英文翻訳とASL（アメリカ手話）に通じている三澤かがり（大塚ろう学校）が邦訳した。

今、ろう学校では、「特殊教育から特別支援教育へ」という枠組みの変化、「場から個のニーズへ」というコンセプトの変化の中で、ろう学校でも家庭訪問支援を実施したり、サテライト教室を開設するなど「個のニーズ」に対応した支援を行う機運が高まっている。

しかし、このような支援はまだ端緒に着いたばかりで、支援の中身についての実践的・研究的蓄積はほとんど皆無といってよい。その意味で、これら二つの資料は、概要的な資料であっても貴重な情報を提供するものとなるのはまちがいない。とくに、これら支援プログラムに示されている支援者側からの情報提供や意見提示のあり方は、あくまで相談当事者個々の選択を重視した公正中立なものであり、その意味では「成熟した」支援と呼びうるものであろう。この点において、ともすれば保護者の心理やおかれた状況に対する配慮よりも、支援者の個人的な意見や価値観を優先してしまいがちなわが国の医療・療育・教育関係者に、多くの示唆を与えるものとなっている。御一読いただければ幸いである。

なお、第2部「ろう者・難聴者による支援」は、原題は“Deaf/Hard of Hearing Connection”であり、立派なろう者・難聴者に育つために必要な、ロールモデルであるろう者・難聴者による支援（関係づくり）といった意味があるが、解りやすくするために改題した。

2006年3月

木島照夫（東京都立大塚ろう学校）

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
三科 潤	新生児聴覚スクリーニング	柳沢正義 五十嵐隆	先端医学シリーズ 34 小児科の新しい流れ	先端医学 研究所	東京	2005	131- 136
三科 潤	聴覚スクリーニング	楠田 聡	新生児の検査・基準値	メディカ出版	大阪	2006	60-63
三科 潤	長期フォローアップと予後 1. フォローアップ体制	仁志田博司 楠田 聡	超低出生体重児	メディカル ビュー社	東京	2005	172- 183
河野由美	超低出生体重児の予後	仁志田博司 楠田 聡	超低出生体重児	メディカル ビュー社	東京	2005	184- 195
坂田英明	見逃されやすい小児のめまい 良性発作性斜頸		ENTONI			2005	1-6
田中美郷	言語発達のトラブルとケア 症状と疾患について		チャイルドヘルス			2005	91-96

和文雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
三科 潤	新生児聴覚スクリーニングの動向	日本マス・スクリーニング学会誌	15(3)	13-17	2005
三科 潤	新生児聴覚スクリーニングの現状と課題	ペリネイタルケア	24(5)	489-495	2005
三科 潤	新生児聴覚スクリーニング:聴覚スクリーニングの現状と今後の方向	周産期医学	35(9)	1254-1257	2005
三科 潤	新生児聴覚スクリーニング	産婦人科の実際	54(12)	2129-2138	2005
三科 潤	新生児聴覚スクリーニング	周産期医学	36(3)	printing	2006
三科 潤	長期予後から見た成育限界ー発達面からー	小児科	46(13)	2101-2105	2005
三科 潤	病院でのフォローアッププログラム	周産期医学	35(4)	483-489	2005
多田 裕	新生児聴覚スクリーニングと産科医・小児科医の役割	周産期医学	35(4)	469-473	2005
加我君孝	新生児聴覚スクリーニング後の精密聴力検査	日本耳鼻咽喉科学会 会報	108	348-349	2005
加我君孝	聴覚大脳インプラントは可能か 聴皮質の解剖と電気生理の視点から	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	77	194-200	2005

加我君孝	幼小児の前庭神経系の代償による バランスと運動の発達的变化	神経研究の進歩	49	216-228	2005
牛尾宗貴 加我君孝	高度難聴児 3 症例の聴性定常反応 について ASSR の長所とその問題 点	小児耳鼻咽喉科	26	68-72	2005
福田章一郎 問田直美 福島邦博 他	新生児聴覚スクリーニングで難聴が 疑われた乳児の聴覚評価	Audiology Japan	48	135-141	2005
福島邦博	耳鼻科的評価と治療・指導 難聴の ハイリスク	周産期医学	35	474-477	2005
福島邦博	人工内耳装用児の長期的な言語発 達	JOHNS	21	601-603	2005
田中美郷	我々の臨床からみた聴覚障害乳幼 児に対する早期療育支援の現状と 問題点	聴覚障害	60	33-40	2005
田中美郷	聾教育の課題と展望 医療・人工内 耳の観点から	聴覚障害	60	4-5	2005
針谷しげ子 田中美郷	新生児聴覚スクリーニング精密検査 後の聴力変動例	Audiology Japan	48	196-204	2005
熊川孝三 鈴木久美子 田中美郷 他	短期入院による乳幼児の他覚的精 密聴力検査 システムの紹介および ABR, 蝸電図, 聴性定常反応, EABR の検討	Audiology Japan	48	156-164	2005
福田章一郎 問田直美 福島邦博 片岡裕子 西崎和則	新生児聴覚スクリーニングで難聴が 疑われた乳児の聴覚評価	Audiology Japan	48	135-141	2005
川崎聡大 杉下周平 福島邦博 片岡裕子 長安吏江 市川智継 西崎和則	軽度難聴児の言語発達に与える高 次脳機能—神経心理学的評価に基 づく認知特性の検討—	小児耳鼻咽喉科	26	51-55	
中川尚志 福島邦博 牧嶋知子 山下道子 賀教康弘 小宗静男	大学病院耳鼻科外来における難聴 の遺伝カウンセリング	耳鼻と臨床	52	1-6	2006

福島邦博	人工内耳装用児の長期的な言語発達	JOHNS	21(4)	601-603	
福島邦博	耳鼻科的評価と治療・指導・難聴のハイリスク	周産期医学	35(4)	474-477	
福島邦博	新生児難聴の診断	日本医師会雑誌	134(8)	1517	
片岡祐子 福島邦博 西崎和則	新生児聴覚スクリーニングと耳鼻科的検査	周産期医学	35(9)	1258-1262	
假谷伸 福島邦博 木林並樹 西崎和則	中耳貯留液から考えること	小児耳鼻咽喉科	26(2)	23-27	
片岡祐子 福島邦博 西崎和則	13.耳鼻咽喉科－新生児聴覚スクリーニング 要精密検査児のフォローアップ－	産科と婦人科	73(1)	70-75	
川崎聡大 福島邦博 片岡祐子 市川智継 中塚秀樹 西崎和則	聴性定常反応検査の周波数別聴力：標準純音聴力検査との比較－BIS 値を指標とした覚醒度の与える影響－	耳鼻と臨床	52(1)	33-37	
坂井有紀 新正由紀子 加我君孝	ろうの両親を持つ高度難聴児の精密聴力検査と関連する問題について	Otol Jpn	15(3)	234-237	2005
新正由紀子 加我君孝	東大病院に 2000～2004 年間に紹介された新生児聴覚スクリーニングを経た症例に関する検討	Otology Jpn	15(5)	639-645	2005

欧文雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Maeda Y <u>Fukushima K</u> Kakiuchi M Orita Y Nishizaki K Smith RJH	RT-PCR analysis of Tecta, Coch, Eya4 and Strc in mouse cochlear explants.	Neuroreport	16	361-365	2005
Kariya S Okano M Hattori H Sugata Y Matsumoto R <u>Fukushima K</u> Schachem PA Cureoglu S Paparella MM Nishizaki K	Th1/Th2 and regulatory cytokines in adults with otitis media with effusion	Otology and neurootology	in printing		
Kakiuchi M Tsujiyama H Orita Y Nagatsuka H Yoshinobu J Kariya S Haginomori S Orita S <u>Fukushima K</u> Okano M Nagai N Nishizaki K	Cyclooxygenase 2 expression in otitis media with effusion	Am J Otolaryngol	27	81-85	2006
Koyama S <u>Kaga K</u> Sakata H Iino Y Kodera K	Pathological findings in the temporal bone of newborn infants with neonatal asphyxia	Acta Oto-Laryngol	125	1028-1032	2005
Sano M <u>Kaga K</u> Kitazumi E Kodama K	Sensorineural hearing loss in patients with cerebral palsy after asphyxia and hyperbilirubinemia	Int J pediatr Otorhinolaryngology	69	1211-1217	2005
Kianoush S Megerian CA Arnold JE <u>Kaga K</u>	Vestibular-Evoked Myogenic Potentials in Infancy and Early Childhood	Laryngoscope	115	1400-1444	2005